



5. 桧垣夫妻の趣味

多趣味の二人

淳三氏は、20歳で「鳥撃ち」を始め、50歳になるまでシーズンになると山へキジやヤマドリを獲りに行った。そのために鳥猟犬を生涯で2匹飼った。最初はアメリカ系のポインター  で「バーク」と名付けた。つぎに飼ったのがイングリッシュ・セッター  で「レイ」と名付けた。いずれの鳥猟犬も淳三氏の素晴らしいパートナーであり、大切な家族の一員となった。しかし、バークは外飼いにしていたため、ある日蚊に刺されてフィラリアに罹ってしまい10歳で亡くなってしまった。その反省からレイは室内飼いし、寝起きも共にした。夫婦喧嘩をしているとレイが間に入ってきてしょんぼりする。こうしたエピソードは数えきれないほどあり、淳三氏が「家族以上の存在」という鳥猟犬との生活は夫婦の生活に潤いをもたらした。バークとレイが亡くなったとき、淳三氏は大泣きした。それほどたくさんの愛情を注いだパートナーだった。2匹目のレイを亡くしてからは、年齢的にも鳥猟犬を飼うのを止めたため、鳥猟は50歳で区切りをつけた。



淳三氏が中山川で釣ったアマゴ

そして27歳で始めたのが渓流釣りである。幼少の頃から魚を獲るのは好きだったが、本格的に渓流釣りを始めたのは鉄工所時代である。渓流釣りは今もつづいており、冬の寒い時期を除いて毎週末、休みができるたびに山に入って魚を釣る。



溪流釣りに行ったときの写真（友人撮影）


写真の天然アマゴの剥製は、淳三氏が西条市にある中山川で捕獲したものである。中山川は、石鎚山系の青滝山を源流とした澄んだ水が流れており、風光明媚な渓谷を持つ。天然アマゴは四国や九州の河川に生息しており、通常のアマゴは20～30cmくらいまでしか成長しないが、淳三氏が釣ったアマゴは50cmくらいの巨大アマゴである。淳三氏の経験によると、雨が降ったシーズンは大きなアマゴが獲れる。なるほど、アマゴは「雨魚」と書き、曇天や雨の日によく釣れる。

釣りのシーズンが終わったら、狩猟シーズンの到来である。淳三氏は、このリズムで仕事の傍ら、趣味を楽しんだ。獲った鳥は行きつけの小料理店で料理してもらい、釣った魚は馴染みの寿司店で調理してもらう。獲物は最後まで余すところなく食す。命の尊さとありがたさを噛み締めながら、感謝して味わう。

趣味はハンターだけではない。野球観戦にも熱が入る。淳三氏は広島東洋カープの大ファンであり、背番号25を付けていた新井貴浩のサイン入りバットを大切にしている。新井選手は、広島市出身の元プロ野球選手であり、1999年～2007年広島東洋カープ、2008年～2014年阪神タイガース、2015年～2018年広島東洋カープで内野手として活躍し、2018年9月に現役を引退した。背番号25は最初に広島東洋カープに所属していた時代の番号である。

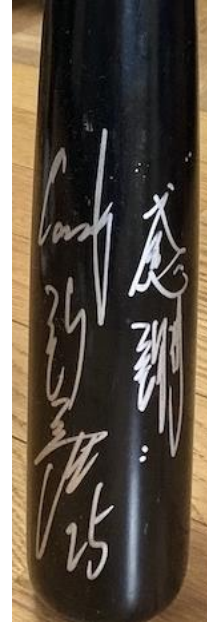
一方の美賀子氏は、淳三氏以上にアウトドア派であり、仕事も遊びも中途半端ではない。何事も思いっきり打ち込み、思いっきり楽しむ。これが美賀子流の人生訓である。

ゴルフは、取引先のタオルメーカーの担当者から「やってみんで？」と誘われたのがきっかけではじめた。今治市周辺にはゴルフ場が点在しておりアクセスは良く、また適度な運動にもなるため、月に1～2回はプレイしている。

趣味の範囲はスポーツに限らない。読書や音楽鑑賞と幅広い。チケットの入手が困難なサザンオールスターズ  のライブにも友人と足を運ぶ。「わしは誘ってくれなかったな」と隣で淳三氏がポロリと言う。

淳三氏と美賀子氏、それぞれ主とする趣味は異なるが、月に一回、二人は一緒にゴルフに出かける。

（完）



新井貴浩選手のサイン入りバット

（文責・インタビュー：辻智佐子）

参考文献

石川和男「わが国のモータリゼーション発展期における自動車産業の環境と自動車メーカーによるマーケティング対応：複数マーケティング・チャンネル制進展の背景」専修大学学会『専修商学論集』第88号、2008年12月、33-54頁。

奥平志づ江「日本刺繍の歴史的考察」立正女子大学短期大学部『研究紀要』第13号、1969年12月、53-58頁。

株式会社上脇

（<http://www.uewaki.co.jp>）。

株式会社タナベ刺繍ホームページ「日本の刺しゅう業とは」

（<https://www.e-tanabe.net/tanabeblog/index.php?e=216>）。

日本ジャガード刺繍工業組合ホームページ

（<http://sishu.or.jp/cat3/cat45/>）。

編集後記

桧垣夫妻とは、今治市内にある寿司の銘店「健寿司」で初の対面を果たしました。「タオルびと」へのご協力をお願いする際、桧垣夫妻が食事に誘ってくれたのです。「健寿司」の大将が釣ってきたというサヨリも刺身で登場。瀬戸内の新鮮な魚とともに、なんとも豪華なもてなしを受けました。そして手土産も。これが感動の代物でした。（株）上脇の上質なタオルに「JOSAI UNIVERSITY」と刺繍されたフェイスタオルです。「逢ったこともないわたしに、心温まる洒落の効いた贈り物を準備するなんて只者ではない」とおもったと同時に、桧垣夫妻の心遣いに涙が出そうになりました。今治のふわふわのタオルに包まれたときのような、あったかい幸せな気持ちになりました。



夜の会食をとおして、桧垣夫妻の飾らない誠実な人柄はひしひしと伝わってきました。インタビューは日を改めておこなうことになりましたが（1ヶ月後）、桧垣夫妻へのインタビューが待ち遠しくおもいました。そしてインタビュー当日、工場と事務所が併設された城東刺繍の本社におじゃまさせていただきましたが、想像以上の大きな建物にびっくりしました。創業からおよそ半世紀、夫婦二人で力を合わせてがんばってこられたことに、またもや感動。

タオルをスペシャルなものにする刺繍加工。タオルに輝きを与える刺繍加工。ワンポイントでも刺繍はタオルを「キレイ」に見せる魔法の加工だと気付かされた、桧垣夫妻との出会いでした。キレイなものをつくるのが幸せ、と言っていた美賀子さんのステキなスマイルがいまでも印象に残っています。

次回の「タオルびと」

「タオルびと」の34人目は、クラウン樹脂化学（株）の大見博記氏である。同社は、タオル専用の染料・染物材料の卸・加工業者であり、今治のタオルづくりには欠かせない存在である。同社の創業者である大見氏は、熊本県出身であるが、どのような縁で今治の地に辿り着き、どのような経緯で商売を始めたのかなど、大見氏のタオル人生について語っていただく。

